# Morphology & Lexicon Forum 2014

**日時**　2014年9月6日(土) 13:30～、7日(日)10:10～

**場所**　大阪大学 豊中キャンパス(http://www1.lang.osaka-u.ac.jp/access.html)

言語文化研究科 A 棟 2 階 大会議室

(http://www.osaka-u.ac.jp/ja/access/toyonaka/files/Part_B.pdf)

セキュリティー管理のため、学会時間帯以外は自動ドアが施錠されている可能性がありますのでご注意ください。

6 日(土)　受付 13:00 から

| | | | |
|---|---|---|---|
| 13:30-14:20 | 発表 1 | 日本語の形容詞派生動詞・形容詞派生名詞の形成とモジュール形態論 | 長谷部郁子(筑波大学非常勤) |
| 14:30-15:20 | 発表 2 | 複合動詞の派生と動作主性に関する形態統語的分析 | 秋本隆之(中央大学大学院) |
| 15:20-15:40 | | 休憩 | |
| 15:40-16:30 | 発表 3 | 自他交替における接尾辞 ar の文法化について | 高橋英也(岩手県立大学) |
| 16:40-17:40 | 招待発表 | 日本語における分離能格性について | 多田浩章（福岡大学） |
| 18:00～ | | 懇親会 | |

7 日(日)　受付 9:50 から

| | | | |
|---|---|---|---|
| 10:10-11:00 | 発表 4 | Telicity Makes or Breaks Lexical V-V Compounds | 福島一彦(関西外国語大学) |
| 11:10-12:00 | 発表 5 | 動詞由来複合語の連濁における第一要素の項性の影響:心理的実在性の検証 | 井川詩織(東京大学大学院) |
| 12:00-13:30 | | 休憩　ランチ | |
| 13:30-15:00 | 講演 | 終止形・連体形の合流について | 青木博史（九州大学） |
| 15:10-16:10 | 招待発表 | テ形複雑述語の多義性をどう捉えるべきか: 文法化アプローチと拡大合成アプローチ | 中谷健太郎（甲南大学） |

＊ 懇親会（会場はキャンパス内ミュージアムカフェ「坂」）の申し込み先（8/20 まで）: 由本まで yoko に続けて@lang.osaka-u.ac.jp にメールでお申込みください。

＊ 6 日の昼食には生協食堂やコンビニがご利用いただけます。7 日は、キャンパス内であいているお店はありません。

長谷部郁子（筑波大学非常勤）

# 日本語の形容詞派生動詞・形容詞派生名詞の形成とモジュール形態論

キーワード：形容詞派生動詞（名詞）、モジュール形態論、モダリティ、属性

本発表で主に取り扱うのは、(1a)に例示される主語の主観的な感情や感覚を表す形容詞を基体とする、(2)のような派生動詞や派生名詞である。(1b)に例示される主語の特性などを述べる形容詞と異なり、(1a)の形容詞は、(3)に示すように現在時制においては省略可能な１人称以外の主語を許容しない（渡辺（1991）、澤田（1993））。

(1) a. 悲しい、楽しい、寂しい、痛い、眩しい、暑い　b. 深い、赤い、大きい

(2) a. 悲しがる/悲しむ、寂しがる/*寂しむ、痛がる/痛む、眩しがる/*眩しむ

b. 悲しさ/悲しみ、寂しさ/*寂しみ、痛さ/*痛み、眩しさ/*眩しみ

(3) {（私は）/*彼は} 悲しい。/ 彼は悲しかった。cf. その川は深い。

(1a)の形容詞は接辞「がる」または「む」の付加により動詞化が可能だが、(2a)に示されるように「む」の方が生産力は低い（杉岡（2009））。また、これらの形容詞は接辞「さ」または「み」により名詞化が可能だが、(2b)に示されるように「み」の方が生産力は低い（伊藤・杉岡（2002））。興味深いことに、(4)に示すように「がる」の付加により(1a)の形容詞を動詞化した場合、(3)とは逆に１人称ではなく３人称主語が許容され、「む」の付加により動詞化すると主語制限が消滅し（澤田（1993））、また、「がる」を伴う動詞を名詞化すると、主語の「属性」（影山（2012））を表すようになる。

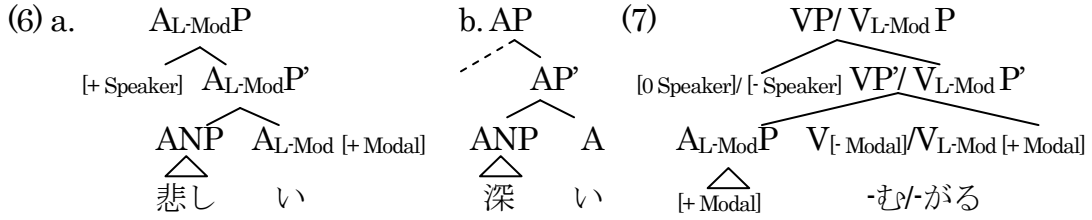
(4) a. {*私は/彼は} 今悲しがっている。/ {私は/彼は} 今悲しんでいる。（澤田（1993））

b. 彼は（*今だけ）{寂しがり屋/痛がり/暑がり}だ。cf. この川は増水後は深い。

なお、(1b)の形容詞は、(5)のように「まる」などの接辞の付加による動詞化や接辞「さ」や「み」により名詞化が可能だが、この場合も「み」による名詞化は生産力が低い。

(5) 深まる、赤らむ　深さ/深み、赤さ/赤み、大きさ/*大きみ cf. 伊藤・杉岡（2002）

本発表では(6)のような形容詞の統語構造を想定する。(6)における ANP は形容名詞（Adjectival Noun（Martin (1975)））を主要部とし、(1a)の形容詞は、(6a)のように、モダリティを表す、機能範疇と語彙範疇の中間的な性質を有する準機能範疇 $A_{L\text{-}Mod}P$ の主要部が補部に ANP を選択することにより形成される。[+ Modal]を備えた $A_{L\text{-}Mod}$ はその指定部に[+ Speaker]素性を有する要素が出現することを要求し、CP システム内の機能範疇 Modal の[+ Modal]と呼応することにより指定部の[+ Speaker]要素が(3)のように省略可能となる（cf. 長谷川（2007））。他方、(1b)の形容詞は、(6b)のように素性のない語彙範疇 AP の主要部が補部に ANP を選択することにより形成される。




本論では、(6a)の構造を持つ形容詞の動詞化にあたり、「む」と「がる」は(7)のように[+ Modal]を有する $A_{L\text{-}Mod}P$ を補部に選択すると提案する。さらに「む」は[- Modal]を持つ語彙範疇 VP の主要部に、「がる」は[+ Modal]を持つ準機能範疇 $V_{L\text{-}Mod}P$ の主要部にそれぞれ基底生成され、準機能範疇に生起する「がる」の方が語彙範疇に生起する「む」よりも高い生産力を持つと仮定する。「む」の[- Modal]は $A_{L\text{-}Mod}P$ の[+ Modal]と CP 内の[+ Modal]との呼応を阻み、$A_{L\text{-}Mod}P$ の指定部の[+ Speaker]指定を[0 Speaker]のように無効化し、「がる」の[+ Modal]は $A_{L\text{-}Mod}P$ とは逆に指定部に[- Speaker]を要求すると考えることで(4)の事実が説明される。(6b)の構造を持つ形容詞の動詞化にあたっては、V に生起する「まる」などの接辞が AP を補部に選択する。

本論では、接辞付加などにより A(N)P や VP などの語彙範疇が持つ[+V]素性を[-V]に変える操作を名詞化と呼ぶ。そして、主語に人称指定をする[+ Modal]を持つ(7)の $V_{L\text{-}Mod}P$ のような要素が名詞化されると(4b)のように主語の「属性」を表すようになり、(2b)の「悲しみ」のような名詞は「悲しむ」のような主観的形容詞派生動詞に「み」が付加されて派生されたと考えられるが、「む」の[- Modal]は主語の人称指定を無効化するので名詞化の結果主語の「属性」ではなく「経験や知覚の対象」を表すと論じる。また「さ」は ANP を、(5)の「深み」などの「み」は AP をそれぞれ名詞化すると議論しこれらの派生名詞の生産性や意味の違いを名詞化する範疇の違いに還元する。最後に本論が「モジュール形態論」（影山（1993））にもたらす理論的貢献に触れる。

参照文献：長谷川信子（2007）「1 人称の省略：モダリティとクレル」 長谷川信子編『日本語の主文現象』331-369. ひつじ書房./伊藤たかね・杉岡洋子（2002）『語の仕組みと語形成』研究社./影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房./影山太郎（2012）「属性叙述の文法的意義」影山太郎編『属性叙述の世界』くろしお出版. 3-35./Martin, S.（1975）*A Reference Grammar of Japanese*, Yale University Press./澤田治美（1993）『視点と主観性 -日英語助動詞の分析-』ひつじ書房./杉岡洋子（2009）「形容詞から作られた動詞」影山太郎編『形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店. 191-222./渡辺実（1991）「『わがごと・ひとごと』の観点と文法論」『国語学』165, 1-14.

秋本隆之（中央大学大学院）

# 複合動詞の派生と動作主性に関する形態統語的分析

キーワード：複合動詞，動作主性，被害使役，他動性調和, Conflation

**1.目的と主張**　Tomioka (2006)，Nishiyama & Ogawa (2011, 2014)では，語彙的複合動詞 V1-V2 において，V1 は複合動詞の内項選択に関与しないことが論じられている。

(1) a. 太郎が花子を言い負かした。（cf. 花子を負かした/*言った）

b. 太郎が服の汚れを洗い落とした。（cf. 服の汚れを落とした/*洗った）

本発表では，「動作動詞 V1＋使役変化動詞 V2」で形成される複合動詞（例: 叩き壊す）を分析対象とし，V2 単独で用いられる場合と，複合動詞 V1-V2 で用いられる場合の主語の性質の違いから，(i) V1 が外項の選択に関与していることを論じ，(ii) V2 の投射する動作主を導入する主要部（より具体的には，複合主要部 V2-CAUSE-VOICE$_{[AG]}$）に V1 が付加することで複合動詞が派生されると主張する。

**2. V2 と複合動詞の主語の解釈**　V2 と主語の関係を見ると，使役変化動詞（例：「壊す，落とす，折る」）の主語は必ずしも意志性を持つ動作主である必要は無い。

(2) a. 太郎が子供を崖から落とした。（意図的読み／非意図的読み）

b. 太郎がラジコンを壊した。（意図的読み／非意図的読み）

(3) a. 太郎がお腹を壊した。（主語＝経験者）

b. 太郎が骨を折った。（主語＝経験者）

(2)の非意図的読みはいわゆる被害使役文(Adversity Causative: cf. Miyagawa 1989)であり，その場合，主語は意志を持たない。また，(3)の主語も意志を持たず経験者として解釈される。しかし，上記の使役変化動詞が主語に動作主を要求するような動作動詞（例：「突く，蹴る，叩く」）と複合すると，非意図的読みや経験者主語解釈が出来なくなる。

(4) a. 太郎が子供を崖から{突き/蹴(り)}落とした。（意図的読み／*非意図的読み）

b. 太郎がラジコンを叩き壊した。（意図的読み／*非意図的読み）

(5) a. ?太郎がお腹を叩き壊した。（主語＝動作主／*経験者）

b. 太郎が骨を叩き折った。（主語＝動作主／*経験者）

(4)では，(2)と異なり，非意図的読み，つまり被害使役としての解釈は不可能であり，(5)では主語は経験者ではなく，動作主として解釈される。この事実は V1 が複合動詞の外項選択に関与していることを示しており，以下の一般化が得られる。

(6) 複合動詞 V1-V2 の内，もし V1 が主語に動作主を要求するならば，派生される複

合動詞の主語は動作主になる。

**3. 提案**　(6)の一般化を説明するため, Haugen (2009)などで提案されている無移動編入(Conflation)を採用し，√Root1(V1)は√Root2(V2)-v-CAUSE-VOICE$_{[AG]}$の複合主要部にConflation によって付加することで，複合動詞 V1-V2 が派生されると提案する。以下に具体的な派生メカニズムを示す。(√Root1 が√tatak, √Root2 が√kowa に相当する。)

(7) a. [$_{vP}$ Int. [$_{v}$ √Root2 v]]

b. [$_{CAUSEP}$ [$_{vP}$ Int. [$_{v}$ ~~√Root2 v~~]] √Root2-v-CAUSE]

c. [$_{VOICEP}$ Ext. [$_{CAUSEP}$ [$_{vP}$ Int. [$_{v}$ ~~√Root2 v]] CAUSE~~] √Root2-v-CAUSE -VOICE$_{[AG]}$]

d. [$_{VOICEP}$ Ext. [$_{CAUSEP}$ [$_{vP}$ Int. [$_{v}$~~√Root2 v]] CAUSE~~] $\boxed{\text{√Root1}}$-<u>√Root2-v-CAUSE -VOICE$_{[AG]}$</u>]

まず, √Root2 が v(ervalizer)と併合し, 内項を導入する(7a)。次に CAUSE が vP と併合し, CAUSEP を投射した後，[√Root2-v]は CAUSE に編入する(7b)。その後, VOICE$_{[AG]}$が CAUSEP と併合し，外項を導入する。[√Root2-v-CAUSE]の複合主要部は VOICE$_{[AG]}$に編入し，[√Root2-v-CAUSE-VOICE$_{[AG]}$]を形成する(7c)。最後に√Root1 が[√Root2-v-CAUSE-VOICE$_{[AG]}$]に Conflate することで, [√Root1-√Root2-v-CAUSE- VOICE$_{[AG]}$]が形成される(7d)。

本分析案では, 動作主を要求する V1 は V2 の投射する VOICE$_{[AG]}$に付加しなくてはならないため，(6)の一般化は，V1-V2 を形成するためには V2 が必ず，VOICE$_{[AG]}$を投射し動作主を導入しなければならないことから説明される。

本分析の帰結としては，まず，(7a)のように，内項が V2 に選択される時点では，V1 は派生に含まれていないことから，V1 は複合動詞の内項選択に関与しないことが説明される。次に，(7d)に示すように, Conflation は編入と同様，主要部の左側に付加する操作であるため(cf. Kayne 1994)，派生される，複合動詞は V1(√Root1)-V2(√Root2)という語順「叩き壊す」になり，V2-V1 の語順「*壊し叩く」にはならない。最後に，本分析は他動性調和の原則に違反する「*叩き壊れる」のような複合動詞の非文法性を正しく予測する。上述したように，動作主を要求する V1 は V2 の投射する VOICE$_{[AG]}$に付加しなくてはならないが，「壊れる」のような自動詞の場合，VOICE は動作主を導入しないため，「叩く」は VOICE に認可されず，「*叩き壊れる」は派生されない。

<u>主要参考文献</u> **Nishiyama, K., & Ogawa, Y. 2014**. Auxiliation, Atransitivity, and Transitivity Harmony in Japanese V-V Compounds. *Interdisciplinary Information Sciences*, 20(2): 71–101. / **Tomioka, N. 2006**. *Resultative Constructions: Cross-linguistic Variation and the Syntax-semantics Interface*. Doctoral dissertation, McGill University.

高橋英也（岩手県立大学）

# 自他交替における接尾辞 *ar* の文法化について

キーワード： 自他交替, 接尾辞 *ar*, 動詞化子, 文法化, 脱使役化

**1.** 本発表は、「集まる, 曲がる, 上がる」のような、いわゆる *ar* 自動詞の諸特徴に対して、接尾辞 *ar* の形態統語論の観点から説明を与えようとする試みである。本発表の中心的主張は次の(1a)であり、*ar* 自動詞文の基本的な動詞句構造として、(1b)を提案する。

(1) a. *ar* 自動詞を形成する接尾辞 *ar* は、動詞「ある」が動詞化子(verbalizer)として文法化したものである(cf. Roberts and Roussou (2003))。

b. [$_{\text{VoiceP}}$ [$_{\text{CauseP}}$ [$_{\text{vP}}$ Loc/Goal/Experiencer [$_{\sqrt{\text{Root}}}$ Theme √Root] *ar*] Cause] Voice]

(1a)は、自他交替における接尾辞の形態についての伝統的洞察（奥津 (1967)ほか多数）に基づき、本来的に存在・所有を意味する動詞「ある」と接尾辞 *ar* の関係を、語彙的意味の希薄化と機能辞化という文脈で捉えようとするものである。

**2.** 影山 (1996)は、例えば「町内会に募金が<u>集まる</u>」のような *ar* 自動詞が、対応する他動詞「町内会が募金を<u>集める</u>」の LCS に対する脱使役化の適用により導かれると主張する。しかし、その分析は、必ずしも経験的事実を正しく予測できない。

例えば、他動詞から自動詞を導く脱使役化分析の予測に反して、「針金が/??主張が 曲がった（cf. 太郎が針金を/主張を曲げた）」のように、自他の間で項の具現が一貫しない事例が存在する。また、「太郎がつり革に/*幸運に掴まった（cf. 太郎がつり革を/幸運を掴んだ)」においては、対応する他動詞の目的語が *ar* 自動詞文では「に」句として具現している。さらに、他動詞「掴む」の動作主「太郎」が、（LCS で抑制されるにもかかわらず）依然として *ar* 自動詞「掴まる」の主語として生起することにも注意されたい。これら一連の事実は、脱使役化分析の下では、補助仮説や特別な規定なしには説明されない。一方、本論の分析(1b)の下では、自他交替に方向性は存在せず、例えば、語根 √*tsukam*-に動詞化子として機能する接尾辞 *ar* が付加することで *ar* 自動詞 *tsukam-ar* が形成される。したがって、基本的に、動詞句内での項の生起が語根の情報に基づく限りにおいて、自他の間での項の具現に関する表層的な不一致は問題にならない。

次に、「<u>大空に</u>凧が上がった」のように、*ar* 自動詞の多くが Locative「に」句を選択する。この点に関連して、岩手県沿岸南部の方言では、他動詞 *nos*(*u*)(＝「乗せる」)に対して、２種類の自動詞 *nor*(*u*) / *nosar*(*u*)が存在する。このうち、*nos* に *ar* が付加していると分析できる後者は、物体の物理的移動を描写する場合にのみ用いられる（「脚立に/*ブームに のさった」)。さて、ここで、Locative をとらない *ar* 自動詞文に目を転じる

と、例えば、「*太郎が挑戦を失敗に終えた」と「挑戦が失敗に終わった」の対比が示すように、定的な結果状態(Goal)への到達は含意される。このような Locative/Goal と接尾辞 *ar* の連携は、「ある」との関連が既に認められている「てある」構文における事態と平行的である（「冷蔵庫にアイスを買ってある」対「窓ガラスが粉々に割ってある」）。

*ar* 自動詞における、接尾辞 *ar* の動詞「ある」に由来する形態統語的性質を認めない限り、これら一連の事実に対して統一的視座に立った説明が与えられるとは言い難い。

**3.** ところで、動詞「ある」には、存在文「机に本がある」と所有文「太郎に娘がある」という 2 つの典型的な用法があり、前者においては主格名詞句が、後者においては「に」句が、それぞれ主語として機能する。本発表の接近法が正しい方向を示しているならば、存在・所有それぞれの動詞「ある」との対応を窺わせる 2 種類の *ar* 動詞文が存在するはずであるが、実際にその予測は成り立つ。存在文に相当する事例としては、「学校に募金が集まった」などが当てはまる。実際に、「（結果として）学校に募金がある」は *ar* 自動詞文で含意される事態を正しく描写している。後者については、例えば、「太郎に大役が務まる」が該当するであろう。「務まる」と共起する「に」句は主語性を示すが、それは、「ある」所有文における「に」句の場合と全く平行的である(cf. 岸本 (2004))。

**4.** 最後に、本発表の分析から得られる帰結と課題のうち 3 点について簡単に述べる。まず、語根と動詞化子の意味的情報量が言語横断的に相対化されている(cf. Arad (2005))とすると、動詞「ある」が機能辞化した接尾辞 *ar* における意味的希薄化の程度について、語彙ごとに検討することによって、興味深い事実や一般化がもたらされるかもしれない。

第二に、西尾(1988)が述べるように、*ar* 自動詞の成立時期が比較的遅かったことを想定すると、文法化された動詞化子 *ar* が語根に付加されることで *ar* 自動詞が派生的に形成されるという本発表の分析は、通時的事実から支持されるかもしれない。

最後に、上述の岩手県沿岸南部の方言では、「募金が集まった/集まらさった」のような *ar* 自動詞といわゆる *rasar* 形の自動詞 (cf. 竹田 (1998))の間に、明確な解釈の違いが見られる。これは、本発表の分析が示す方向性においては、*atsum-ar* における動詞化子 *ar* に加えて、更に上位の機能範疇の具現としての *ar* が（少なくとも特定の方言においては）存在することを示唆する事実として捉えることができるかもしれない。

**主要参考文献**

影山太郎 (1996)『動詞意味論』くろしお出版

西尾寅弥 (1988)『現代語彙の研究』明治書院

『日本語における分離能格性について』(“On Split Ergativity in Japanese”)

多田浩章（福岡大学）

日本語の可能述語文における「与格–主格」型と「主格–対格」型の格交替（例：「太郎に英語が話せる」⇔「太郎が英語を話せる」）は、類型論的にしばしば観察されている完了(perfective))と未完了(imperfective)のアスペクト素性の対立に起因する分離能格性(split ergativity)の一種であることを論じ、その諸帰結を考察する。

福島一彦（関西外国語大学）



# Telicity Makes or Breaks Lexical V-V Compounds

key words: lexical V-V compounds, telicity, verbal aspects,
aspectual composition, Japanese

Lexical V-V compounds (1a-c) have attracted much attention, e.g. Kageyama (1993), Matsumoto (1996), Nishiyama (1998), Fukushima (2005/2007), Yumoto (2005), inter alia. However, they focus on argument-synthesis based on argument-structures of component verbs, e.g. two subject arguments are identified in *odori-tukareru* 'dance-get.tired'. (Im)possible patterns of argument-synthesis have been identified and given accounts of various sorts. Though Fukushima (2007) deals with productivity of such compounds, the perspective is argument-centered as well.

(1) a. cause/resultative compound: *odori-tukareru* 'dance(atelic)-get.tired(telic), i.e. get tired from dancing', *obore-sinu* 'drown(telic)-die(telic), i.e. die from drowning', etc.
b. manner compounds: *tabe-nokosu* 'eat(atelic)-leave(telic), i.e. leave (food) after eating', *koroge-otiru* 'roll(atelic)-fall.down(telic), i.e. fall down rolling', etc.
c. coordinating compound: *hikari-kagayaku* 'shine(atelic)-glitter(atelic), i.e. shine and glitter', *naki-sakebu* 'cry(atelic)-scream(atelic)', etc.
d. **naosi-tukau* 'repair(telic)-use(atelic), (INT.) use after repairing (something)', **hiroge-uru* 'spread(telic)-sell(atelic), (INT.) sell after spreading (merchandise)', **koware-nokoru* 'break(telic)-remain(atelic), (INT.) remain after breaking', **taosi-fumu* 'fell(telic)-step.on (atelic), (INT.) step on after felling (something)' [N.B.: cf. *fumi-taosu* 'step.on(atelic)-fell(telic)), i.e. fell (something) by stepping on it'], etc.
e. Taroo -ga terebi-o [naosi sosite tukat-ta]
-NOM TV-ACC repair CONJ use-PAST
'Taroo repaired and used a TV'

In this paper, a different dimension regarding $V_1$-$V_2$ combination is investigated based on the aspectual properties of component verbs. First, it is empirically shown that $V_1$ cannot be telic (achievement/accomplish)—a 'spoiler'—unless $V_2$ is also telic. Any other patterns are possible. Second, (im)possible aspectual combinations are shown to be a consequence of ASPECTUAL COMPOSITION based on the analysis of aspectual classes of predicates found in Dowty (1986). [N.B.: Simply 'telicity' is employed here due to (i) achievement and accomplishment are telic and (ii) the latter needs an incremental theme (or VP), which is absent for lexical word-formation.]

In contrast to (1a-c), the ones in (1d) with a telic $V_1$ and an atelic $V_2$ are impossible, which are constructed observing possible argument-synthesis patterns. In fact, of 1157 V-V compound examples found in Tagashira and Hoff (1986), there is only one potential counter example for this generalization (also see below). We note that as in (1e), taken as successive events, there is nothing incompatible about 'regular' conjunction of, for example, $V_1$ *naosu* 'repair' and $V_2$ *tukau* 'use'. Also noted is the fact that when switched around **taosi-fumu* (telic-atelic) in (1d) becomes a licit compound *fumi-taosu* (atelic-telic).

The current account draws on Dowty (1986) who classifies aspectual classes of predicates as in (2). [N.B.: Dowty's original definitions classify sentences but they are adapted here for predicates. Krifka (1998) or Filip (2008) is an alternative.] Reflecting the basic characteristics, ASPECTUAL COMPOSITION for V-V compounds is stated as in (3). With (3d-(i)) a termination point is imposed on an atelic $V_1$, which never-the-less satisfies the properties (2a-b), rendering possible an example like *odori-tukareru* 'dance(atelic→telic)-get.tired(telic)'. In contrast, (3d-(ii)) requires a telic $V_1$ to satisfy (2a-b) but that directly contradicts (2c), rendering, for example, **naosi-tukau* 'repair(telic$\not\rightarrow$atelic)-use(atelic) impossible.

(2) a. A predicate is stative (atelic) iff it follows from the truth of a sentence $\phi$ to which the predicate gives rise to is true at an interval $I$ that $\phi$ is true at all subintervals of $I$.
b. A predicate is activity (atelic) iff it follows from the truth of a sentence $\phi$ to which the predicate gives rise to is true at an interval $I$ that $\phi$ is true at all subintervals of $I$ down to a certain limit in size.
c. A predicate is achievement/accomplishment (telic) iff it follows from the truth of a sentence $\phi$ to which the predicate gives rise to is true at an interval $I$ that $\phi$ is false at all subintervals of $I$.

(3) Aspectual composition (for v-v compounds):
a. A v-v compound represents a single event with sub-events denoted by $v_1$ and $v_2$.
b. Aspectual composition is head-driven (i.e. $v_2$ determines the aspectual property of the whole compound). [N.B.: In principle, Japanese is morphologically head-final.]
c. When $v_1$ and $v_2$ match in telicity, the whole compound is of the same telicity as the head's.
d. When $v_1$ and $v_2$ differ in telicity, (i) if $v_2$ is telic, an termination-point (distinct from an inception-point) is imposed on the interpretation of $v_1$, or (ii) if $v_2$ is atelic, the truth-at-all-subintervals requirement (2a-b) is imposed on the interpretation of $v_1$.

Potential counter examples, though limited in number (e.g. *yake-nokoru* 'burn-remain'), are entertained. Also, comparisons are made between the current approach and other suggestions like Li (1993), Matsumoto (1996), and Yumoto (2005).

The current paper is a contribution to research regarding not only relatively under-explored aspectual properties of lexical v-v compounds but also the nature of aspectual composition of complex entualities.

**References**


Dowty, David. 1986. The effects of aspectual class on the temporal structure of discourse: semantics or pragmatics? *Linguistics and philosophy* 9, 37-61.

Fukushima, Kazuhiko. 2005. Lexical v-v compounds in Japanese: lexicon vs. syntax. *Language* 81, 568-612.

Fukushima, Kazuhiko. 2007. On the type-wise productivity of lexical v-v compounds in Japanese: a thematic proto-role approach. *Gengo Kenkyu* (Linguistic Research) 134, 119-140.

Filip, Hana. 2008. Events and maximalization. *Theoretical and crosslinguistic approaches to the semantics of aspect*, ed. by Susan Rothstein. Amsterdam: John Benjamins. 217-256.

Kageyama, Taro. 1993. *Bunpoo-to gokeisei* (Grammar and word-formation). Tokyo: Hitsuji.

Krifka, Manfred. 1998. The origins of telicity. *Events and grammar*, ed. by Susan Rothstein. Dordrecht: Kluwer. 197-235.

Li, Yafei. 1993. Structural head and aspectuality. *Language* 69, 480-504.

Matsumoto, Yo. 1996. *Complex predicates in Japanese: a syntactic and semantic study of the notion 'word'*. Stanford: CSLI.

Nishiyama, Kunio. 1998. V-v compounds as serialization. *Journal of East Asian Linguistics* 7, 175-217.

Tagashira, Yoshiko and Jean Hoff. 1986. *Handbook of Japanese compound verbs.* Tokyo: Hokuseido.

Yumoto, Yoko. 2005. *Fukugodoshi/haseidoshi-no imi-to togo: mojuru keitairon-kara mita nichieigo-no doshi keisei* (The semantics and syntax of compound verbs/derived verbs: verb-formation in Japanese and English viewed from a modular morphological perspective). Tokyo: Hitsuji.

井川詩織（東京大学大学院）

**動詞由来複合語の連濁における第一要素の項性の影響：心理的実在性の検証**

（キーワード：連濁, 複合, 語形成レベル, 産出実験）

動詞由来名詞を第二要素とする複合語において、第一要素が元の動詞の内項である場合には連濁が起きず(1a)、付加詞である場合には連濁が起きる(1b)傾向（以下、項性条件）があることは、伊藤・杉岡(2002)、Sugioka (1986, 2002)等で指摘されてきた。特に Sugioka(2002)は、内項複合語が項構造レベルで、付加詞複合語が LCS レベルで、それぞれ形成されることでこの差が生まれると主張しており、項性条件を語形成レベルの区別の根拠としている。だがこの条件には(2)のような例外が多くあることが知られている。さらに Kozman (1998)が連濁の有無が複合語の第一要素の解釈を左右するかを検証する理解実験を実施したが解釈に差は見られず、項性条件の存在自体が疑問視されてきた(Kawahara, 2012)。

(1) a. 窓ふき（窓を拭く）、場所とり（場所をとる）

b. 水ぶき（水ぶき）、先どり（先にとる）

(2) 色づけ（色をつける）、ニスがけ（ニスをかける）

そこで本研究は、Sugioka (2002)の主張の実験的検証を目的とし、第一要素の項性によって連濁が左右されるかという点、連濁と同じく項性の影響を受けるとされるアクセントが項性条件以外の要因で変化した場合に、直接的に連濁に影響を与えるかという点を調査した。語形成レベルの区別に基づいて項性条件を支持する Sugioka (2002)の主張は、第一要素の項性による有意な差があり、項性の影響を受けるが連濁とは独立した現象であるはずのアクセントの操作による連濁の有意な差はない、と予測する。

本研究の実験では、Kozman(1998)の問題点（解釈に対する語用論的知識の影響や項性の影響を受けるアクセントが解釈に及ぼす影響等の可能性）を排するため質問紙による産出実験で、和語として与えた新語名詞と動詞を参加者に複合させた。刺激は、第一要素の項性（項(3c)(3d)か付加詞(3a)(3b)か）とアクセント（起伏型か平板型か）という２種類の条件をラテン方格で組合わせたものを用いた。アクセントは、(3a)(3c)では複合語アクセント規則により起伏型となるが、(3b)(3d)では第三要素の付加により語形成レベルとは無関係に平板化が起こる。実際の刺激としては、(3’) のように(3)の情報に文脈を加えたものを与えた。

(3) a. 窓をひせで拭く→ （　　）　　ひせ＝窓拭きの道具

b. 窓をひせで拭く→　（　　）要員　　ひせ＝窓拭きの道具

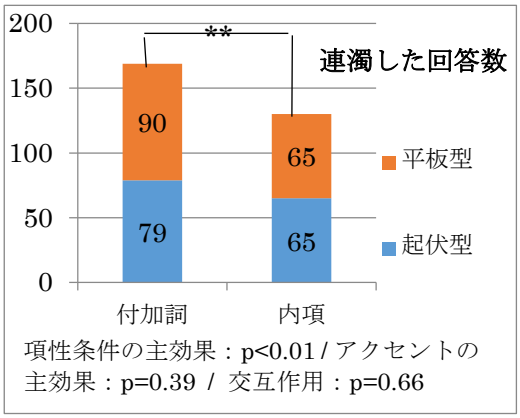
c. ひせを拭く→　（　　）　　ひせ＝窓

d. ひせを拭く→　（　　）要員　　ひせ＝窓

(3’) ある地方では「ひせ」という窓を拭くための道具があり、窓をひせで拭く習慣があります。どの家庭でも子どもが窓の（　　）要員となって活躍します。

実験の結果（グラフ）は、内項複合語が付加詞複合語よりも連濁しにくいこと，項性と無関係なアクセントの操作は連濁の起こりやすさに影響を与えないことを示しており、項性条件の実在性を支持する。ただし、内項条件で連濁、付加詞条件で非連濁、という例外的な回答も見られた。さらに、予期されていなかった二項動詞と三項動詞による連濁の差が見られた(p<0.01)。これは例外的データの説明に関して示唆的である。

この結果は、動詞由来複合語における連濁の項性条件の心理的実在性を支持する初めてのデータで、語形成レベルの区別の根拠ともなる。また問題である項性条件の例外に関して分析の手掛りを提示する点でも、有意義である。




参考文献：

伊藤たかね, 杉岡洋子. 2002. *語の仕組みと語形成*. 研究社

Kawahara, Shigeto. 2012. Psycholinguistic Studies on Rendaku. handout for Rendaku Project Meeting on November 11th, 2012. Online: http://user.keio.ac.jp/~kawahara/pdf/RendakuExpts.pdf

Kozman, Tam. 1998. The Psychological Status of Syntactic Constraints on Rendaku. *Japanese/Korean Linguistics*. 8: 107-120.

Sugioka, Yoko. 1986. *Interaction of Derivational Morphology and Syntax in Japanese and English*. New York: Garland

Sugioka, Yoko. 2002. Incorporation vs. Modification in Japanese Deverbal Compounds., *Japanese/Korean Linguistics*. 10: 496-509.

# 終止形・連体形の合流について

青木博史（九州大学）

古代語（上代〜中古）においては，文を終止する際には終止形が用いられた。

（1）a.　女，塗篭の内に，かぐや姫を抱へてをり。　（竹取物語・かぐや姫の昇天）
　　b.　その里に，いとなまめいたる女はらから住みけり。　（伊勢物語・初段）

ところが，院政期頃から連体形が文終止に用いられるようになる。

（2）a.　カシコナル女ノ頭ニケダモノヽアブラヲヌリテヲル。　（三宝絵・中）
　　b.　心ニ慈悲有テ身ノ才人ニ勝タリケル。　（今昔物語集・巻 19－2）

（2a）は会話文，（2b）は地の文の例である。そして室町時代以降，このように連体形で文を終止することが一般的になった。終止形と連体形が合流したわけであるが，その内実からすると，「連体形終止の一般化」と呼ぶ方がふさわしい。

この現象を考えるにあたっては，①喚体文の衰退，②「連体なり」構文の発達，③係り結び構文の発達，の３つを視野に入れる必要がある。「喚体文」とは，山田孝雄によって提唱されたもので，体言を骨子とする特殊な文であり，用言（述語）を中心とする「述体文」と区別される。

（3）a.【感動喚体】麗しき花かな。人の音信もせぬ。
　　b.【希望喚体】老いず死なずの薬もが。

連体形は，それ自体体言的に働いて準体句を構成する用法があり，準体句の文末用法は喚体文相当である（山田は「擬喚述法」と呼んでいる）。

（4）a.　夏草の露分け衣着けなくに我が衣手の乾る時もなき　（万葉集・1994）
　　b.　いかにある布勢の浦ぞもここだくに君が見せむと我を留むる　（万葉集・4036）

こうした「体言を中心に呼びかける文」は，和歌など特定の文体・場面を除いて衰退する。

準体句の文末用法は，物語の会話文においては「解説」のように用いられる。

（5）a.　御子のたまはく，「命をすてゝかの玉の枝持ちてきたる，とて，かぐや姫に見せたてまつり給へ」と言へば，翁持ちて入りたり。　（竹取物語・蓬莱の玉の枝）
　　b.　「…こころみの日かく尽くしつれば，紅葉の蔭やさうざうしくと思へど，見せたてまつらむの心にて，用意させつる」など聞こえたまふ。　（源氏物語・紅葉賀）

こうした解説的表現は，準体句のみでは表せなくなり，繋辞「なり」を明示するようになる。

（6）a.　はやても［龍の吹かする］なり。はや神に祈り給へ。　（竹取物語・龍の頸の玉）

b.　［狐の仕うまつる］なり。この木のもとになん，時々あやしきわざなむし侍る。

（源氏物語・手習）

この「連体なり」構文は，現代語の「のだ」文につながるものである。

係り結び構文は，準体句の文末用法（＝喚体文）を起源としながらも，時代が下ると述体文へと変容を遂げている。

（7）a.　行く水の留めかねつとたはことか人の言ひつるおよづれか人の告げつる

（万葉集・4214）

b.　底清くすまぬ水にやどる月は曇りなきやうのいかでかあらむ。　（源氏物語・常夏）

上代の係り結び文には，（7a）のように【係「か」－主格「の」－述語連体形】といった語順法則が認められる。これが中古に至ると，（7b）のようにこの語順法則は守られなくなっており，さらに「喚体文」の文末には現れえない，推量の助動詞「む」が文末に現れるようになっている。

以上のように，準体句の文末用法は，その体言的性格（名詞性）を保持できずに衰退していることが分かる。結局のところ，これは，文末という位置におかれたことの宿命であったといえる。たとえば，「ようだ」という助動詞は，「連体節＋やう（様）＋なり」という名詞述語文であったが，文末であるために脱範疇化が起こり，「述語＋やうだ」という構造に再分析される。

（8）a.　こなたかたなの目には，杏を二つつけたるやうなり。　（竹取物語・龍の頸の玉）

b.　今夜は大（だい）ぶ土手が永（ながい）やうだ。　（遊子方言・発端）

こうして連体形終止文は体言性を失い，通常の述語文を形成するようになったと考えられる。終止用法を獲得した連体形は，元からある終止形と機能が重なることになったが，これに際しては，終止形は古い形式と認識され，新しい連体形を選択したと考えられる。鎌倉時代における「旧終止形」は，対句や前置き表現のような定型化した表現の中に姿をとどめるのみとなっている。

（9）a.　敵は少なし，味方は多し，勢にまぎれて矢にもあたらず，　（平家物語・巻 9）

b.　四方はみな敵なり，御方は無勢なり，いかにしてのがるべしとは覚えねど，

（平家物語・巻 4）

こうした歴史変化は鎌倉期に一気に起こったわけではなく，終止形が文語的（規範的）であるという認識は，連体形が終止用法で用いられ始めた院政期にもすでにあったと考えられる。

（10）a.　夜ニハ成ニタリ，今夜ハ家へハ故ニ行不着ジ。　（今昔物語集・巻 29－5）

b.　これは，みな人のしろしめたる事なれば，こともながし，とどめ侍りなん。

（大鏡・巻 1）

# テ形複雑述語の多義性をどう捉えるべきか：
# 文法化アプローチと拡大合成アプローチ

中谷　健太郎（甲南大学）

日本語におけるテイク，テクル，テアゲル，テクレル，テモラウ，テオク，テシマウ，テイル，テアル，テミル，テミセルなど「V1 テ V2」型のいわゆるテ形複雑述語の意味論については，国語学・日本語学の分野では通常「補助動詞 V2」の多義性の問題として扱われてきた（たとえば寺村 1984）。しかし多義性が母語話者の言語知識の中でどのような形で実現しているかという問い(Pustejovsky, 1995)に答えようとした場合，単に用法を羅列するだけでは不十分である。さらに，母語話者には「補助動詞 V2」が「本動詞としての V2」と形態論的・意味的に関連しているという直感があり，その直感（これを仮に語彙的関係性と呼ぶ）が言語知識の中でどのような位置を占めているかについても言語理論は応えるべきである。

この語彙的関係性について，拡大合成(Jackendoff, 2002)を通した共時的派生として捉える立場(Nakatani, 2013)があるものの，先行研究では，明示的であれ非明示的であれ，文法化の問題として捉えられることが多い（Shibatani, 2007; 三宅 2005 など）。中でも非常に明示的に文法化のアプローチを提唱する Shibatani (2007)は，寺村(1984)のテ形補助動詞の意味漂白化についての分類を批判し，尊敬語化，項構造，断片化，否定のスコープの振る舞いの違いをもとに，あらたな「文法化の連続変異」の階層を提唱している。本発表では，ここでいう「文法化現象」が実際に何を捉えているのかについて批判的に検証し，Shibatani (2007)の指摘する現象を，拡大的な意味合成の原理から説明する可能性を追求する。

参考文献：三宅知宏. (2005) 「現代日本語における文法化」『日本語の研究』1: 61–75.／Nakatani, K. (2013) *Predicate Concatenation: A Study of the V-te V Predicate in Japanese.* Kurosio.／Pustejovsky, J. (1995) *The Generative Lexicon.* MIT Press.／Shibatani, M. (2007) Grammaticalization of Motion Verbs. In Frellesvig, et al. (eds.) *Current Issues in the History and Structure of Japanese*, 107-133. Kurosio.／寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版.